

在 外 研 修 報 告

1983年11月から12月にかけて2ヶ月間、オランダを中心に、文部省の在外研修員としてヨーロッパを訪問することができた。テーマは「写真測量の文化財への応用」である。

オランダは古くより写真測量に関して指導者的立場にある。私が40日間籍を置いた「航空測量のための国際トレーニングセンター」(ITC)も、1955年発足以来、数多くの写真測量の技術者を全世界に送り出している。1966年には名称を「国際航測・地球科学研究所」と変え、写真測量以外の分野にも輪を広げたが、長年親しまれたITCの略称はそのまま受け継がれている。

研修のコースには大きく、写真測量・航空写真・地形図コース、天然資源調査コース、社会科学総合調査コース、の3コースがあり、それぞれのコースがさらに細分化され、全コースは実に40におよぶ。私の希望したコースは当然写真測量コースであるが、正規の履修期間は最短で6ヶ月、長いもので18ヶ月であるため、特に「航測およびリモートセンシング応用コース、スペシャル」というのを作っていただいた。勿論そのコースの生徒は私一人である。学生は若干名のアメリカ、西ドイツ、イタリー、日本人を除いては、ほとんどが開発途上国の人達で、300人以上の収容能力のある学生用のゲストハウスは各人種の博物館といった様相である。

ITCの教育施設は素晴らしい。様々なタイプの図化機、今はやりの解析図化機も揃っている。飛行機の内部さながらにこしらえた航空写真撮影士教育用のシュミレーターもある。ナビゲーションスコープを覗くと、空中から地上を見ているように床下の写真が流れる。実際にも双発機を所有しており、実地実習もできる。私の受講した講義は遺跡の写真判読、航空写真を利用した都市計画など多岐に亘るが、なかでも、リモートセンシングの第一人者、ヘンベニアス教授の「リモセンと写真測量の離婚」論は面白い。「リモセンは、写真測量本来にはなんら寄与していない。ランドサット衛星の打ち上げで、たまたま写真測量の専門家が判読に加わっただけのことで、2者が熱にうかれて結婚したようなものだ。ハネムーン時代も過ぎて10年、そろそろ性格の不一致という理由で離婚するべきである」。私も日頃、衛星写真によるリモセンが写真測量の一派というだけでなく、学会の主流派であることに疑問を感じていたので、リモートセンシングの専門家にしてこの言あり、我が意を得た思いであった。

講義の合間を見て、先年当所にもこられた、フローニンゲン大学のウォーターボルク先生を訪ねた。フローニンゲンはオランダの北方に位置し、遺跡の密度が濃い地域である。古墳や住居跡の発掘現場や旧跡を先生の車で案内していただいた。遺跡ではないが、堤防に囲まれた広大な干拓地には目を見張った。その干拓地からオランダ黄金時代の沈没船がすでに300艘以上も発掘され、保存処理、展示がされている博物館も見学できた。そこでも遺構の実測に写真測量を導入しており、若い考古学者に技術的な質問を受けた。文化財のみならず、地上写真測量の分野では日本の方が明らかに進んでおり、ITCの教課コースにもそれは無い。その点を質問したところ、お前が講師になってコースを開いてくれという返事であった。(伊東太作)